国際医療福祉大学
2020年10月5日発行 学校法人国際医療福祉大学
https://www.iuhw.ac.jp/

「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. 122
October
2020

医学部 白衣式（国際医療福祉大学病院）

赤坂山王メディカルセンターオープン

医学部の臨床実習開始

夏のオープンキャンパス開催

2020年度年間成績優秀賞

赤坂山王メディカルセンターがオープン

赤坂山王メディカルセンター（以下赤坂ＳＭＣ）が８月１日、オープンした。院長・予防医学センター長には、銭谷幹男・元山王メディカルセンター院長が就任。オープン初日には、国際医療福祉大学Ｗ棟玄関でテープカットが行われた。

●赤坂山王メディカルセンターが入るW棟（右端）

オープン当初は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で患者数が伸びないことが心配されていたが、内科や人間ドックを中心に患者様が訪れており、大きな混乱もなく順調な滑り出しとなった。

●オープニングセレモニーの様子

赤坂ＳＭＣは、４月に完成した国際医療福祉大学東京赤坂キャンパスＷ棟内に位置し、予防医学センター（４～６階）と外来部門・リハビリテーションセンター（７階）がある。５月にオープンを予定していたが、新型コロナ対策などで延期していた。

人間ドックは、２機のＭＲＩ（３・０、１・５テスラ）や80列マルチスライスＣＴなどの高度な検査機器を配備し、山王メディカルセンター同様、ゆったりとした環境で、きめ細やかな健診を行う。ドックの後は、建物内のレストランでおいしいお食事を召し上がっていただくことができる。

●人間ドック専用フロア

７階の外来部門では、内科と整形外科、小児科の診療を行う。内科は、消化器内科、循環器内科、リウマチ科、脳神経内科の各専門医による外来を開設している。肝臓疾患の権威である銭谷院長、脳神経内科は天野隆弘本学学事顧問はじめ、脳卒中を専門とする内山真一郎医師（東京女子医科大学名誉教授）、関節リウマチを中心としたリウマチ・膠原病分野を中心に内科全般の診療にあたる増子佳世医師ほか、各診療科とも充実した布陣で診療を行っている。

整形外科では、院内にリハビリテーションセンターを備え、充実したリハビリテーションも見据えた診療が可能だ。小児科では、小児科診療全般に30年以上携わった経験豊富な医師が、外来診療に加え、３階に併設の赤坂山王病児保育室のお子様の診療にあたる。山王病院小児科と連携した万全の体制で、周辺の住民の皆様に安心してご利用いただける、気軽で温かな小児科をめざしている。

リハビリテーションセンターでは、介護予防や日常生活の自立、心身機能の維持・向上を目的に行う通所リハビリテーションを中心に、医療リハビリテーションも行う。高性能の体力評価・治療機器を完備し、山王病院のリハビリテーションセンターと連携を取りながら、経験豊富な理学療法士や作業療法士が、患者様お一人おひとりにあったプログラムをご提案する。

●リハビリテーションセンター

赤坂ＳＭＣは、赤坂見附駅から徒歩３分と大変アクセスがよく、多くの検査が実施可能な施設だ。新規の患者様はもちろん、これまで山王メディカルセンターで予約が取りにくかった患者様もスムーズにご案内できるようになった。外来患者様やお知り合い、ご友人など、多くの皆様のご紹介をお願いいたします。

（総務課　山本悦子）

院長のご紹介

新任挨拶

赤坂山王メディカルセンター
院長
銭谷　幹男

東京慈恵会医科大学卒、同大学院修了、医学博士。米国Yale大学博士研究員。元東京慈恵会医科大学大学院消化器内科教授。慈恵医大総合健診・予防医学センター長。

８月１日付で、新設の赤坂山王メディカルセンター院長を拝命いたしました。４月末までは４年間、山王メディカルセンター院長・予防医学センター長として消化器内科を担当しておりました。赤坂山王メディカルセンターにおいても山王メディカルセンターと同様の外来担当で、消化器病（特に肝疾患症例）の診療と健診を継続いたします。

赤坂山王メディカルセンターは山王病院、山王メディカルセンターと同様に医療法人財団順和会のもと設置された医療機関で、山王メディカルセンター同様の医療機器・設備を有し、診療ならびに人間ドック検診を行います。また、通所リハビリの施設も備え、地域医療のお役に立てばと存じます。今後とも宜しくお願いいたします。

医学部の臨床実習開始

医学部４年次（１期生）の臨床実習が６月から始まった。当初４月に開始する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期されていた。実習先の各病院では、コロナ対策で多忙な中、質の高い実習を行うため、協議を重ねてあたたかく迎えていただいた。

実習の日程は、前半は６月１日～10月23日（夏期休暇７月23日～８月30日）、後半は11月２日～３月26日（冬期休暇12月26日～１月３日）の予定で始まった。

前半の実習は、▽栃木エリア配属＝国際医療福祉大学病院・塩谷病院、その他▽東京エリア配属＝三田・成田・市川・熱海の附属病院と外部５病院の精神科▽九州エリア配属＝高木病院・福岡山王病院で行う。

４年次の臨床実習は『臨床実習Ⅰ』としての履修であり、今後、５年次の『臨床実習Ⅱ』、『臨床実習Ⅲ』、さらに、６年次の『臨床実習Ⅳ』（海外臨床実習を含む）と続いていく。

臨床実習に先立ち、３年次の２学期に共用試験（ＣＢＴとＯＳＣＥ）を実施した。臨床実習前に受験し合格することが求められるもので、基礎・臨床医学の知識や基本的臨床技能・態度が評価される。

また、臨床実習初日の６月１日、国際医療福祉大学病院では、「白衣式」を執り行った。臨床実習に臨むにあたり、学生が医師をめざす心構えを新たにするためのもので、栃木エリア配属の学生全員が参加した。

●白衣を受け取る学生たち

まず、大和田倫孝病院長が「受け入れの挨拶」として、コロナ禍にあって、実りのある実習を提供するための協議を重ねてきた経過を述べた。続いて、病院長以下先輩医師の介添えで、学生は持参した白衣に袖を通した。その後、大草由美子看護部長が「励ましのことば」として、患者さんやご家族の不安に寄り添うことの大切さについて説明した。これらを受けて、最後に学生代表の中村龍太さんが「誓いのことば」を述べ、「ここ栃木での出会いを大切にし、深い愛情と思いやりの心をもって接する」と誓った。

（広報　金井雅之）

International University of Health and Welfare **IUHW** vol.122 October 2020 CONTENTS

5-2 トピックス
赤坂山王メディカルセンターがオープン
医学部の臨床実習開始
日本診療放射線技師会の新会長、上田克彦教授が抱負語る
第24回あいおいニッセイ同和損保奨学生認証式
成田病院 地域連携協議会を開催
てんかんセンターを開設

7-6 特集 本学の新型コロナ対策
入試説明会を開催

8 2020年度年間成績優秀賞

9 キャンパスレポート

11-10
大田原 病院見学会を開催／令和2年度『関連職連携実習報告会』
成田 留学生らに防災セミナーを開催／東葛飾高等学校が医学部を見学
東京赤坂 医療マネジメント学科3年次実習
小田原 小田原市長が「大学教養入門」授業／子育て支援センター「靴の選び方」講座
大川 大川地区で留学生歓迎交流会

13-12 写真特集
各キャンパスで夏のオープンキャンパスを開催

15-14 施設インフォメーション
国際医療福祉大学病院／成田病院／塩谷病院／三田病院／熱海病院／市川病院／山王病院

16 キャンパスプラスー クラブ・サークル紹介（番外編）
よさこいチーム（大田原キャンパス）

日本診療放射線技師会の新会長、上田克彦教授が抱負語る

診療放射線技師の全国組織である公益社団法人「日本診療放射線技師会」（ＪＡＲＴ）の会長改選（今年６月）で、成田保健医療学部放射線・情報科学科の上田克彦副学科長（教授）が選任された。上田教授は今年61歳。前任の京都大学医学部附属病院時代に務めた「全国国立大学放射線技師会」の会長に続く公職就任である。

●上田教授が日本診療放射線技師会の会長に

「Ｘ（エックス）線が医療現場で使われて約１２５年。放射線が医療現場で永遠に使われるかは分からないが、画像診断や放射線治療の重要性はすぐには変わらない」

Ｘ線が画像診断の中心だった時代に診療放射線技師の世界に飛び込んだ。当時、理論だけの存在だったＭＲＩ（磁気共鳴画像診断装置）は、現在では医療現場になくてはならないものとなり、より高度な性能を備えつつある。さらに医療現場で扱う先端医療機器の自動化も進む。「誰もが的確に検査画像の提供ができることが医療の質と安全担保に必要だと思う」と語る。

画像診断の重要性が変わらないなかで、診療放射線技師の役割は変化のさなかにある。放射線医の読影を補助する役割が、現場の技師に求められる。患者さんの静脈からの抜針行為や、直腸へのカテーテル挿入も診療放射線技師の仕事となった。仕事の変化は大学でのカリキュラムにも変容をもたらす。上田教授は「本学が時代の先端に立って、新しい時代の診療放射線技師を育成する」と述べ、本学での教育に強い意欲を示す。

全国で活躍する現役の診療放射線技師は、現在５万人あまり。ＪＡＲＴの会員数は３万人前後で推移し、組織率は56％程度だ。「会長として会員数を４万人に増やしたい。職能団体として規模を備えることで社会の要請に応えてゆく」と語る。理想とする国民の医療福祉の向上に向けて、時代とともに歩む「対話と協調」を診療放射線技師の世界に広めたいという。

（成田キャンパス広報室　山本秀也）

うえだ・かつひこ＝山口大学、京都大学の医学部附属病院放射線部で、いずれも診療放射線技師長を歴任。山口大学では附属病院の医療人育成センターコメディカル育成支援部門長として医療職の育成にも携わった。成田保健医療学部での放射線・情報科学科新設にともない本学に着任した。61歳。

第24回あいおいニッセイ同和損保奨学生認証式

２０２０年度第24回国際医療福祉大学・あいおいニッセイ同和損保奨学生認証式が６月23日、東京都渋谷区のあいおいニッセイ同和損害保険株式会社本社で行われた。

新型コロナウイルス感染症拡大のため、本学からは今年度奨学生になった８人のうち代表２人と大友邦学長らが出席した。あいおいニッセイ同和損保からは金杉恭三社長らが顔をそろえたが、双方とも参加者は少人数で、例年より規模を縮小して開催した。

例年だと奨学生全員が抱負などを述べるが、今回は西片春馬さんとＪＡＲＧＡＬＳＡＩＫＨＡＮ　ＳＡＲＵＵＬＫＨＵＮＡＮさんの２人が奨学生を代表して自己紹介した。金杉社長挨拶の後、２人に認証状が授与された。

これに対し、大友学長が長年にわたる同社の支援に対しお礼の挨拶をするとともに、奨学生に激励の言葉を贈った。

●金杉社長挨拶

同奨学金制度は、あいおいニッセイ同和損保の前身の同和火災海上保険株式会社が１９９７年、創業１００周年を記念し、本学の「医療福祉分野の人材を育成する」との趣旨に賛同して始まったもの。今年度で受給者は通算２１５人になった。

今年度奨学生になった学生は次の通り。

◆高橋由依さん（保健医療学部放射線・情報科学科２年）
◆栗原寿里愛さん（医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科２年）
◆相馬健人さん（成田保健医療学部理学療法学科２年）
◆JARGALSAIKHAN SARUULKHUNANさん（同　医学検査学科１年）
◆西片春馬さん（赤坂心理・医療福祉マネジメント学部　医療マネジメント学科２年）
◆菅南美さん（小田原保健医療学部看護学科３年）
◆松尾沙椰さん（福岡看護学部看護学科２年）
◆八尋祐香さん（福岡保健医療学部作業療法学科２年）

国際医療福祉大学成田病院

公津の杜小学校からの応援メッセージ

国際医療福祉大学成田病院のスタッフあてに、成田市内にある公津の杜小学校の生徒の皆様からたくさんの応援メッセージが届いた。大きな模造紙に一人ひとりのメッセージカードが貼られ、「コロナの中がんばってくれてありがとう」「びょういんの先生にはコロナをふきとばす力があると思います」「毎日朝早くから夜おそくまではたらいてくれてありがとう」などの応援や、「コロナにかからないようにきをつけてください」など当院のスタッフに対する心配りが記された手紙もあった。

どれも生徒の皆様の想いが伝わる素敵なメッセージで埋め尽くされていた。なかには絵本のように複数ページにわたってメッセージが書かれている力作もある。

●掲示したメッセージを読む職員

これらのメッセージは生徒の皆様の発案とのことで、公津の杜小学校の校長先生が直々に成田病院へお持ちくださった。現在メッセージは、院内の各所に掲示され、毎日職員の励みとなっている。まだまだコロナウイルスに脅かされる日々が続くが、生徒の皆様の力強い応援に応えられるように、職員一同、一丸となって地域医療に従事していきたい。

公津の杜小学校の生徒の皆様、温かい応援をどうもありがとうございました。皆様の想いに応えられるように、職員一同、一丸となって頑張ります。

（広報室　七島寛子）

●いただいた応援メッセージ

第１回 地域医療連携懇談会を開催

８月30日、成田病院として初となる地域医療連携懇談会を開催し、約１００人の地域の先生方にご参加いただいた。開催に際し、当院の医師や職員は全員ＰＣＲ検査を受け、陰性を確認した。

当日は内覧会、国際ホールでの第１部・第２部、レストランでの懇親会という構成で実施した。内覧会では、職員だけではなく各診療科部長たちが自ら来院者をご案内、県内の導入実績が少ないトモセラピーや最新鋭機種のリニアックが設置された放射線室、ハイブリッドオペ室、リハビリテーションセンターなどをはじめ、予防医学センターや健康増進センターなどを内覧いただいた。国際ホールでは、成田市医師会の菅谷会長、医師団の國保団長からご挨拶をいただき、当院の宮崎病院長が日曜の開催にもかかわらず参加いただいた謝辞と地域との連携の重要性について言及した後、グループと病院の紹介動画を上映した。

●連携懇談会

●内覧会の様子

２部では消化器外科部長の板野理副院長（本学医学部消化器外科学主任教授）と本学心臓外科統括部長の高梨秀一郎教授がそれぞれ講演した。その後、最上階にあるレストランオーブでアクリル板を設置して感染拡大防止に十分配慮しながら懇親会を開催、各診療科部長が診療科の紹介スピーチを行った。

今回、多くの地域の先生方にご参加いただき、当院と医師のご紹介ができたことをきっかけに、今後ますます円滑な医療連携を実現し、地域に貢献していけるよう尽力したい。

（広報室　七島寛子）

てんかんセンターを開設

国際医療福祉大学成田病院は９月１日、「てんかんセンター」を開設した。

同センターでは、脳神経内科・脳神経外科などと連携し、日本てんかん学会認定専門医が、長時間ビデオ脳波モニタリング検査による診断を行って治療方針を決定する。また、難治性てんかんに対する外科的治療を行う。

センター長に就任した赤松直樹医学部教授は、同学会認定指導医・専門医で、これまでは福岡山王病院の脳神経内科で診療を担当。産業医科大学医学部神経内科准教授、第47回日本てんかん学会学術大会副会長などを歴任し、25年間で４千人以上の内科治療、４００人の外科的治療に携わってきた第一人者だ。豊富な臨床実績や知見を生かし、高度で包括的なてんかん医療をリードしている。高齢者てんかんの治療の重要性を訴えていくことにも力を注いでいる。

センターではこのほか、河島雅到脳神経外科部長・脳卒中センター長、中里道子精神科部長、脳神経内科の上原平医学部准教授、小児科の塚田洋樹医学部助教らが連携して診療にあたっている。

●赤松直樹センター長

コロナ禍の中、万全の対策講じて授業

後期の授業が9月24日、各キャンパスで始まった。新型コロナウイルス感染拡大が続いているが、医療福祉教育には、対面授業や実習が欠かせず、オンラインでは十分に対応しきれない内容もある。このため、各キャンパスでは活動制限指針などを作り、感染防止を図りながら対面型授業を原則としつつ、オンラインを取り入れたハイブリッド型授業を併用。感染拡大が収束しきらない中でも高度な教育を続けていく工夫をし、立派な技術と意識を持った医療人育成を進めている。

医学部では対面授業を原則としつつ、一部オンラインと組み合わせながら対応していく。病院実習は感染者数の多い地区への配属人数を減らし、学生の通学距離などを考慮しながら配属している。

そのほか、各キャンパス共通の対策が多いが、例えば大田原キャンパスでは、登校者率4分の3を目安に分散登校とし、教室定員も70％以下に変更。学生は毎日、登校前に体温を測定して健康管理フォームへの入力や、教室入室時の手指消毒を徹底し、通学途上や教室内ではマスクを着用、会話は控えている。密を避けるため、スクールバスを増発。発熱や咳、味覚障害などの体調不良があれば登校せず、自宅療養して所属学科に連絡をする。

カフェテリア（学生食堂）などでは座席の間隔を大きく離し、飛沫防止パネルを設置した。向かい合わせには座らず、マスクを外しているときは会話をしない。昼食時間帯は食事優先で、それ以外の利用はなるべく避けるようにしている。

部活動などは当初禁止したが、今後は段階的に再開する。注意事項を徹底し、各部員には参加を強要せず、本人の意思・判断を尊重して活動する。ただし、合宿や飲食を伴う活動は当面禁止している。

成田キャンパスでは、実習・演習科目に限り、6月からすでに対面授業を拡大。実習は、受け入れが承諾された関連・近隣の施設で順次行った。ただ、学生や保護者が実習参加をためらった場合などに学内実習に切り替えたケースもある。一部の学科や実習領域では、今年度の外部施設実習を断念し、学内実習や短期の施設見学で代替した。

学生にはフェイスシールドの配布を検討。売店では入場人数を制限している。

●ソーシャルディスタンスを確保して行われた医学部の対面授業

東京赤坂キャンパスも同様の措置を取って6月から一部対面授業を再開したが、都内の感染者数増加で、7月後半は再びオンライン授業に戻った。定期試験は筆記試験、レポート提出に加え、オンライン試験も導入した。実習は後期に延期したり、学外施設から学内実習に変更したりした。学生相談室は電話やZoomを活用して行っている。

小田原キャンパスでは、自宅の他、入構前にも検温し、名前、入構時間、退出時間を管理し、入構許可を示すネックストラップを着用している。休暇中は教員の確認が取れている学生に限り、一定時間だけ入構を許可する。時間内でも図書館の利用は入れ替え制としている。

大川キャンパスでは、発熱者がいた場合、事務部が解熱まで追跡調査。高木病院と連携し「復学外来」を設置し、PCR検査にも対応している。毎日、感染防止策についての館内放送を実施するほか、メールで定期的な注意喚起を行っている。

大学院では、医療機関に勤務する院生が多く、勤務先から外出を自粛するよう指示されているケースもあり、原則として後期もオンライン授業が中心だ。実習は再開しているが、シミュレーターを使った学内演習での代替も行っている。

最善の教育環境をつくるためには解決が求められる課題が多い。オンライン授業では学生の印刷経費負担が増えている。学生の生活環境の中でWi-Fi環境が整わないケースもある。設備に対する経費や手間がかかり、一部で施設不足などの支障も出たので対策を講じている。

また、感染者が出た場合の対応や学生同士の人間関係、個人個人の精神的ケアなどの問題も起きてくる。こうした問題を1つひとつ解決しながら、より良い教育環境づくりを模索している。

初の「学内実習」での感染防止対策

赤坂心理・医療福祉マネジメント学部医療マネジメント学科では、設立以来初の「医療福祉施設実習」で、当初、病院実習を予定していた。しかし新型コロナウイルスの東京都における7・8月時の急激な感染拡大の影響を受け、赤坂キャンパス内での「学内実習」に急遽切り替えた。

「学内実習」開始にあたり、最初に文部科学省・厚生労働省等の通知・事務連絡・衛生管理マニュアルや、日本病院会の規程及び同診療情報管理士教育委員会からの通知文書等を確認し、各基準に基づく体制や実習内容を整えた。

さらに医学部の「健康ダイアリー」をベースに、本部からの感染症の対応に関する注意喚起文書の基準に従い、オンライン形式の「健康チェック表」を作成。実習開始以前から、学生に毎朝体温測定結果と症状の有無を「健康チェック表」に入力の上、実習開始前に送信させた。原則、症状がある学生にはきめ細かな個別ヒアリング、PCR検査、陰性結果を確認してから実習に参加させる、という手順で臨んだ。なお、陰性結果後も日々ヒアリングの上、様子を観察した。

学生は入室する際に、手指消毒・マスク着用確認、検温器による検温チェックや体調に関するヒアリングを受けた。教室では、2席（2メートル）以上あけ、座席指定とし、窓を常時開放し終日換気するなど対策をしつつ、COVID―19に関する情報を参照し、日々感染防止に努め9月11日、無事「学内実習」を終えることができた。＝11ページに関連記事

（医療マネジメント学科事務室　塚田わかな）

附属病院などでコロナ検査拡充

新型コロナウイルス感染拡大で、附属病院や関連医療機関ではいち早く検査体制を整備した＝別表。検査体制の拡大・充実は、地域医療の担い手であるグループ医療機関の社会的責務を果たすだけでなく、本学で学ぶ学生やグループで勤務する教職員を感染から守ることも主眼としている。検査体制を有する関連医療機関では、自施設内で検査が完結するため、必要時に対象者を制限することなく、また迅速に検査を実施することができる。

日々刻々と感染の流行状況は変わっているが、いつでも「安心して授業を受けられる。実習に臨むことができる」、また、「安心して業務に従事することができる」よう、更なる検査機器の拡充を推進している。

ウイルス感染が疑われる場合、病原体を保有しているかどうか判断するため、PCR法やLamp法による核酸（遺伝子）増幅検査を実施する。無症状であっても、医師が必要性を確認した場合は保険診療として実施することができる。

一方、本人の希望により検査する場合は、全額自己負担となる。国際的な経済活動が徐々に再開され、ビジネス等の目的で海外へ渡航する場合、渡航先により、本邦出国前の陰性証明が入国条件や、渡航先でのビジネス活動が許可される要件となっている。グループ医療機関では、このような検査ニーズへの対応も開始した。

また、医療機関によっては過去に新型コロナウイルスに感染していたかどうかを調べる抗体検査も実施している。

検査費用や予約方法等については各医療機関や目的によって異なるため、事前に問い合わせいただきたい。

グループ医療機関	核酸増幅検査		抗体検査
	PCR法	Lamp法	
国際医療福祉大学病院		●	
国際医療福祉大学塩谷病院		●	
国際医療福祉大学成田病院	●	●	●
国際医療福祉大学市川病院		●	●
国際医療福祉大学三田病院	●	●	●
山王病院		●	
国際医療福祉大学熱海病院		●	

●グループ医療機関での新型コロナウイルス検査実施状況（2020年9月1日現在）※PCR法による検査が実施できる施設を順次拡大する。

オンライン上での学生募集活動が本格化

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、例年どおりのオープンキャンパスや説明会実施が難しくなったため、それに代わる措置として、受験生に向けたオンライン上でのコンテンツ制作などを始めている。

まずは動画制作。キャンパス紹介や、教員による学科説明、入試ガイダンスなどの動画を各キャンパスで制作し、ホームページや本学のYouTube公式チャンネルで公開した。チャンネル登録者数は1200人を超え、多くの受験生が閲覧してくれている。特にキャンパス紹介動画では、各キャンパス独自の施設や設備などを詳しく見ることができ、実際のオープンキャンパスでのキャンパスツアーに近い体験をできる仕上がりとなった。

次に、テレビ会議システムZoomを使用したオンライン入試相談を開始した。事前予約制でホームページから申し込みを受け付け、各キャンパスの入試担当職員とZoomを使用して個別に相談が行える。キャンパスに足を運ぶことができない受験生から、入試内容や学生生活などについて、さまざまな質問があがった。

その他にも、LINEやTwitterの公式アカウント運営など、直接コミュニケーションが取れない受験生に対しても情報発信を積極的に行うようにしている。今後はこのようなオンライン上での学生募集活動が主流となっていくことが予想されるため、多くの受験生に本学の魅力が伝わるよう、より一層努めていきたい。

海外保健福祉事情2020 今年はオンラインで交流

総合教育科目「海外保健福祉事情」では20年以上にわたり、例年夏冬の休暇中に約10日間の海外研修を実施してきた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、海外渡航は全方面中止となったが、このような状況下で幸いにも賛同いただいた各国協定先とオンラインでの交流を実現することができた。

8月21日に中国リハビリテーション研究センター（CRRC）との交流を実施した。CRRCトップの呉世彩主任と本学大友邦学長の挨拶に始まり、本学の卒業生による中国の医療制度や高齢化問題についての講義が行われた。

同月26日にはシンガポール工科大学（SIT）との交流も行った。SITの学生20人と本学の学生29人が10グループに分かれ、両国の医療事情や新型コロナウイルスの状況について意見交換した。

こうしたオンライン交流は、マレーシア、タイ、台湾、カンボジア、ハンガリーとも行い、9月中旬まで続いた。

世界的パンデミックの収束が見通せない中、今まで積み重ねてきた海外協定先との関係をこのような形で維持できることに感謝しつつ、今回の取り組みが今後も続くであろう「新しい日常」の中の国際交流を発展させるための一助となることを願っている。

（大田原キャンパス国際室　藤原志保）

●中国リハビリテーション研究センターの皆様

赤坂で医学部について

医学部は6月20日と8月29日、東京赤坂キャンパスで来年度入学試験についての説明会を開催した。

6月の説明会では最初に、河上裕医学部長が「医学部で何ができるの？」をテーマに講演した。

この中で、「本学医学部の学生7人に1人は留学生で、大多数の科目が英語による授業を行う。4週以上の海外臨床実習の必修化や世界最大級5300平方メートルのシミュレーションセンター（SCOPE）など最新の学修環境を備えている」と紹介した。そのうえで、「新しい医学教育の考え方に基づいてゼロから作られた最新のカリキュラムにより、将来世界で活躍できる医師の養成をめざす医学部です」と説明した。

●河上学部長による講演

続いて、医学教育統括センター長の赤津晴子教授が、新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、「ポストコロナ時代でも変わらない医学教育は何だと思われますか」と問いかけ、「本学の医学教育は①国際性、多様性を重視した教育②生涯教育を主体とした学びを行う③支えあう学びのコミュニティを提供する―ことは変わらない」と述べ、現在、そして未来の取り組みを紹介した。さらに「新型コロナウイルス感染をバージョンアップの機会にしていきます」と展望を話した。

「この国の未来を背負う皆さんへ」と題して講演した河村朗夫・循環器内科学主任教授は、本学の特色として、「教員と生徒の距離が近い。教員の情熱があふれている。ダイバーシティに富んでいる」と、自らの取り組みや体験を踏まえて紹介し、「良質でかつ患者さんに喜んでもらえる医療を提供する」ことを理念としていることを強調した。

最後に吉田素文・副医学部長兼医学科長が本学医学部のカリキュラムと2020年度入試の結果、2021年度入試について詳しく説明した。

ババエフ・タメルラン医学教育統括センター助教が日本語に英語を交えて司会進行を務めた。

●会場の様子

続いて、第2部として留学生、帰国生向けに英語による説明会を開催した。医学部総合教育センターの高須賀茂文教授が留学生と帰国生向けの特別選抜の概要について説明した後、赤津教授とともに参加者からの質問に答えた。

説明会はいずれも、新型コロナウイルス感染予防のため完全予約制とし、1000人収容の講堂で、定員を300人に限定して開催した。

宇都宮、郡山で大田原キャンパス

宇都宮市で6月28日、福島県郡山市で7月11日にそれぞれ、大田原キャンパスの保健医療学部4学科（理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、視機能療法学科）と医療福祉学部の説明会を開催した。

最初に新井田孝裕副学長（保健医療学部長・視機能療法学科長）が「本学と保健医療の魅力」をテーマに、1995年に日本初の医療福祉の総合大学として開設した本学が現在、全国6キャンパスに11学部26学科となり、このうち大田原は3学部8学科、学生数は3761人であることなどを紹介した。

続いて、第1部として、久保晃理学療法学科長、谷口敬道作業療法学科長、阿部晶子言語聴覚学科長、視機能療法学科長でもある新井田副学長がそれぞれ4学科の特長を説明した。

第2部は、医療福祉学部説明会。田中秀一学部長が講演し、同学部医療福祉・マネジメント学科には社会福祉、精神保健福祉、介護福祉、診療情報管理、医療福祉マネジメントの5コースがあることを紹介。それぞれの将来の仕事の内容を詳しく説明しながら、国家資格など各種資格試験で常に高い合格率を維持していることを強調した。

●会場の様子

続くパネルディスカッションで、医療福祉・マネジメント学科の小林雅彦学科長、山本康弘副学科長、それに卒業生、在学生が学科の特長やキャンパスライフについて語り、参加者は熱心に聞き入っていた。

薬学部も宇都宮で

大田原キャンパス薬学部は6月21日、宇都宮市の栃木県総合文化センターで、入試説明会を開催した。

最初に、百瀬泰行学部長が講演し、本学薬学部の特長について、「臨床に強い薬剤師の育成」であることを説明した。この中で、本学グループには実習拠点となる6附属病院をはじめ、医療福祉の関連施設が多くあることや、学修サポートや健康のサポート、学費のサポートなどが充実していることを紹介した。

●百瀬学部長による講演

続いて、八木秀樹薬学科長が「社会に求められる薬剤師とは」をテーマに、就職先が病院や調剤薬局だけにとどまらず、製薬企業で研究職や開発職、リスクマネジメントリーダーとして、さらに公務員、大学教員などとして、幅広く活躍できることを説明。常に就職率100％を誇り、再就職にも強い理由や、これから求められる薬剤師像など、薬剤師の魅力について語った。

白石昌彦薬学教育強化対策室長は「国試トップ合格へ　本学の取り組み」と題して、本学が薬剤師国家試験合格率順位（私立大学新卒）で、ここ5年間、全国1位が3回、2位が2回であることを紹介、国試出題範囲の分析や出題例を挙げて、具体的な本学の学修環境や、手厚い国試対策の取り組みについて詳しく説明した。

説明会は、検温や手指のアルコール消毒を徹底するなど感染防止策をとって行った。

2020年度 年間成績優秀賞

2020年度年間成績優秀賞受賞者が決まった。新型コロナウイルス感染対策で、成田キャンパスでは7月31日、大友邦学長らが出席して簡素化した表彰式を行った。他のキャンパスでは式典を見送った。

同賞は各学科の2年生以上で、学業成績などが優れた学生を顕彰し、奨学金を授与する。今年度は6キャンパス78人が受賞した。

●成田キャンパス 年間成績優秀賞表彰式

大田原キャンパス

保健医療学部

看護学科	2年	山下　明香莉
	3年	日下　結稀
	4年	田澤　姫華理
理学療法学科	2年	外所　真実
	3年	宮前　瑠香
	4年	小松　京香
作業療法学科	2年	小野寺　志織
	3年	小澤　巴菜
	4年	長嶺　美月
言語聴覚学科	2年	吉村　綾香
	3年	佐藤　のどか
	4年	八百井　紀香
視機能療法学科	2年	杉田　拓真
	3年	本田　朱里
	4年	伊藤　千容
放射線・情報科学科	2年	鈴木　明日花
	3年	佐藤　杏菜
	4年	橘川　結衣

医療福祉学部

医療福祉・マネジメント学科	2年	栗原　寿里愛
	3年	金子　稜菜
	4年	武藤　彩奈

薬学部

薬学科	2年	坂本　晴夏
	3年	藤平　ほのか
	4年	栗原　卓巳
	5年	荒井　慎之介
	6年	髙橋　健人

成田キャンパス

医学部

医学科	2年	PHAM QUOC HOANG
	2年	VUONG PHUC DAI
	2年	CHO HAYOUNG
	3年	神野　規人
	3年	河口　奈々桜
	3年	TRUONG NHAT NGUYEN
	4年	情野　麻衣
	4年	DANG THANH HUY
	4年	小西　真衣

成田看護学部

看護学科	2年	水越　萌佳
	3年	荒井　袋都
	4年	伊藤　拓

成田保健医療学部

理学療法学科	2年	髙橋　幹人
	3年	滝澤　麻梨亜
	4年	保科　美月
作業療法学科	2年	岡本　莉奈
	3年	福來　里美
	4年	加納　裕遵
言語聴覚学科	2年	岡部　まりん
	3年	霜鳥　将
	4年	石井　櫻子
医学検査学科	2年	東海林　航太
	3年	柴田　陽来
	4年	平沢　佳与

東京赤坂キャンパス

赤坂心理・医療福祉マネジメント学部

心理学科	2年	大石　知佳
	3年	鈴木　結実菜
医療マネジメント学科	2年	西片　春馬
	3年	福岡　未貴

小田原キャンパス

小田原保健医療学部

看護学科	2年	岡本　実結
	3年	曽根　誠麗
	4年	山口　明日香
理学療法学科	2年	江成　崚
	3年	林　紗穂
	4年	藤田　勇輝
作業療法学科	2年	加邉　春佳
	3年	関根　郁実
	4年	名桐　之絵

福岡キャンパス

福岡看護学部

看護学科	2年	松尾　沙椰
	3年	前田　美芙優
	4年	岡田　有加

大川キャンパス

福岡保健医療学部

理学療法学科	2年	HUANG WEICHEN
	3年	柿本　渚帆
	4年	今里　彩伽
作業療法学科	2年	満石　夏妃
	3年	幸山　千紘
	4年	笠　柊香
言語聴覚学科	2年	俵野　桃佳
	3年	久保田　遥香
	4年	宮崎　莉帆
医学検査学科	2年	木下　愛
	3年	鋤﨑　愛稀
	4年	亀園　遥華

第121回 大田原 キャンパスレポート

病院見学会を開催

保健医療学部看護学科の総合型選抜出願希望者を対象とした病院見学会を9月5日、国際医療福祉大学病院で開催した。昨年を上回る受験生69人と保護者が参加した。

見学会では看護部長による看護師業務についての説明を行ったほか、実際に勤務する看護師と受験生とのフリートークの場が設けられ、看護師という職種への理解を深める機会となった。また、国際医療福祉大学の附属病院について詳しく紹介し、卒業後に働く環境について、受験生や保護者が知る機会でもある。

例年行われていた院内の見学は新型コロナウイルス感染症の影響で院内施設の動画視聴に変更したが、医療の最前線で活躍する看護師との交流から得られるものは多く、会場を去る受験生の表情からは充実感がうかがえた。

（入試広報室　深澤耕太）

●看護部長の説明に聞き入る参加者

令和2年度『関連職種連携実習報告会』

「関連職種連携実習報告会」が8月29日、大田原キャンパスで行われた。学科横断のチームを編成し、チーム医療を学ぶ「関連職種連携教育」の最終ステップだ。

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大が懸念されたため、感染対策を講じながら、4施設・8チームの実習を実施した。

国際医療福祉大学病院・国際医療福祉大学塩谷病院のチームは、今年度初の試みとして医学部の学生とチームを組んだ。医学部生が参入することで、専門職では補いきれなかった、チーム医療・チームケアによる学びを得ることができた。

報告会では、病院の実習指導者に参加していただき、また、在学生・成田キャンパス教員にはオンラインシステム（Zoom）で接続し、実習の成果を報告した。医療現場の実情に沿った質問や感想を受け、さらに理解を深めることができた。

（教務課　佐藤幸絵）

●関連職種連携実習報告会

第19回 成田 キャンパスレポート

留学生らに防災セミナーを開催

成田キャンパスで学ぶ海外からの留学生と、教育・研究に携わる外国人教員や家族を対象とした防災セミナーが6月20日、WB棟の成田国際交流センター（NIC）を拠点に遠隔方式で行われた。

成田キャンパスには、今年度20カ国・地域から来日した留学生や外国人教員が在籍している。国際色豊かなキャンパスだが、それだけに留学生らが地震や台風を実際に経験した際の反応の度合いは、出身の国・地域によりさまざまだ。

昨年9月に房総半島を直撃した台風15号は、千葉県内で57・5トルの最大瞬間風速を記録する猛烈な風で激しい被害をもたらした。こうした台風は、たとえば北アジアのモンゴルから来日した留学生には初めての体験だろう。故国の大草原を見舞う暴風雪や、砂漠の砂嵐とは違った心構えが必要になる。

講師には、成田市から陸上自衛隊OBの米田徳久危機管理専門官を招き、本学職員の英語通訳を介しながら、日本を見舞う地震や台風から身を守る方法を学んだ。成田市など行政が発信する外国語情報へのアクセスの説明もあり、参加者からは、「英語の通訳があって大変助かった」「避難について分からなかったことがよく理解できた」との感想が寄せられた。

（成田国際交流センター　山本秀也）

●成田国際交流センター（NIC）で行われた遠隔方式による防災セミナー

東葛飾高等学校が医学部を見学

本学と高大連携協定を結んでいる千葉県立東葛飾高等学校の1年生48人と2年生25人が8月4日、医学部を見学した。一昨年、昨年に続き、今年で3回目となった。

大学紹介のあと、1年生は成田シミュレーションセンターの見学と神経学の模擬授業、2年生は英語の模擬授業を体験した。最後は、再び全員で解剖学の模擬授業に臨んだ。骨の模型を使って人体の構造を学んだあと、自分で選んだ骨をデッサンした。提出されたデッサンは教員がチェックし、後日、生徒に戻された。

（広報　金井雅之）

●骨のデッサンに取り組む高校生。
こうして、ひとつひとつの骨の「かたち」を把握していく。

第7回 東京赤坂 キャンパスレポート

医療マネジメント学科3年次実習

医療マネジメント学科は、診療情報管理士受験資格の要件となる初めての『医療福祉施設実習』（3年次必修科目）を8月後半から9月前半の3週間実施した。「病院実習」の予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大で、キャンパス内で十分な感染予防策をとったうえでの「学内実習」となった。

「医療」「情報」「経営」という異なる分野を統合した演習で、情報通信技術（ICT）を活用した「DPCデータ分析」を体験。チームで多様な考えを検討し、データ分析結果を講堂でプレゼンテーションした。この結果、学生は複眼的な思考による現実的課題の分析、検討、解決などさまざまなリテラシーの獲得ができたようだ。教員からは「1週目と2週目では、学生は全然違う。著しい成長だ」との感想があった。「実習で突き抜けた」という学生の言葉が成果を端的に表している。

今回「学内実習」が実施できたのは、各教員が培ってきた研究業績、実務経験、豊富な人脈と、情熱的な指導及び本部職員の多大な尽力や関係者らの協力があったからに他ならない。また講堂を使用したことで、大舞台での発表体験の場を学生に与えることができた。

（医療マネジメント学科事務室　塚田わかな）

●講堂でのプレゼン

第52回 小田原 キャンパスレポート

小田原市長が「大学教養入門」授業

本学の理念「人間中心の大学」に基づいた学生生活を送るため大学教育の本質や医療人としてのあり方を理解し、「社会に開かれた大学」の学生として、地元、小田原市の市政や産業に関わる物事を理解する1年次必修科目「大学教養入門」の授業を4月27日から7月16日の間、9回にわたって行った。

医療人としての心構えや、医療教育で必要となる科学知識の基礎、ライフスキルや情報リテラシー、接遇などを学ぶ一方、小田原についての知識・理解を深めるため、小田原市の歴史とこれからの市政について、5月に新たに就任した守屋輝彦小田原市長に講義をしていただいた。

感染症対策のためオンラインでの実施となったが、市長には小田原市の産業や自然、歴史上の人物、文化などを時代の変遷に合わせて説明いただいた。また、現在の感染症対策、今後の市の政策方針を学び、理解を深めた。

この中で学生は「小田原や県西地域の自然環境、交通利便性、歴史・文化の力を結集することができれば、困難な課題を乗り越え、世界が憧れるまち〝小田原〟を創ることができる」とのメッセージを受け取った。4年間を過ごす小田原について、より関心を持ち、また医療人としてどのように地域に貢献できるかをそれぞれが自覚する機会になった。

（学務課　稲葉博之）

●オンライン講義中の守屋市長

子育て支援センター「靴の選び方」講座

小田原市からの依頼で本学の教員が市内子育て支援センターで育児相談や講座開催など子育て支援活動を続けている。8月28日の講座では、過去人気が高かった「靴の選び方」講座を改めて開催した。

子どもの足の構造など難しそうな内容から始まった講座だったが、参加者は「靴を選ぶときに気をつけるポイントにつながる」と大きく頷きながら聞き入っていた。

本来であればセンターで直接親子とふれあいながら開催するところだが、Zoomを利用した初めての講座となった。いつもと違う雰囲気に違和感は否めなかったが、画面越しの親子は自宅にいることもあり、リラックスしている様子だった。また、開講直前に突然雨が降ったが、天気を気にせず自宅で参加できる点はこれまでにないメリットだと感じた。

昨年までは事前に本学からいくつか講座テーマをセンターに提案していたが、今年は過去の人気講座からリクエストを受けた。これまでの活動の成果を実感した。

これからも教員の専門分野を活かし、リクエストに困るくらいの企画を提案して本学を少しずつ身近に感じてもらいたい。そして楽しみながら子育ての役に立ててもらえるようセンター利用者に寄り添っていきたい。

（総務課　伊能理恵）

●鈴木啓介講師（理学療法学科）

第58回 大川 キャンパスレポート

大川地区で留学生歓迎交流会

大川地区留学生歓迎交流会が8月22日、留学生サポートセンター主催で開催された。大川キャンパス学部留学生、別科留学生のほか、九州地区で実習中の成田キャンパス医学部留学生、大川看護福祉専門学校介護福祉学科留学生を合わせた留学生24人、日本人学生12人、教職員13人の計49人が参加した。

浴衣の着付け体験では、留学生の色とりどりの浴衣姿に会場は沸き立ち、ファッションショーさながらの盛り上がりを見せた。マイ団扇づくりでは、医学部の留学生が、絵付けとして精緻な心臓の解剖図を描いてみせ、周囲を驚かせる一幕もあった。柳川市の掘割を「どんこ舟」で巡る川下りは、感染予防に配慮して実施した。マスクを着用しても、蝉しぐれに負けじと唄声を披露する船頭の心意気に、皆が手拍子と歓声で応え、柳川の夏の風情を満喫した。

午後の交流会は、オンラインで実施した。グループごとにレクリエーションを楽しみ、最後は別科留学生がこの日のために準備したミャンマー、日本の歌をそれぞれ動画で披露し、オンライン上で皆が心を一つに合わせた。

終了後、参加留学生から「日本人学生が優しくリードしてくれた」「またこのような会があれば是非参加したい」といった声が聞かれた。

（国際係　杉原活郎）

●留学生歓迎交流会

各キャンパスで夏のオープンキャンパスを開催

Otawara Campus

大田原キャンパス

今年の夏の大田原オープンキャンパスは、新型コロナウイルス感染拡大の大きな影響をうけた。計4回の来校型のオープンキャンパスを予定していたが、前半の2回は急遽オンラインでの開催に変更、5日間という短い準備期間に関わらず教職員が協力し、無事開催することができた。

後半2回は、受験生の進路選択に関わる重要な機会を損失しないため、来校型で開催した。開催にあたり、感染対策の観点から決められたルートに沿って学科の教室を巡る体験ツアー型に変更した。教員も工夫を凝らし感染予防に十分配慮しながらも、来場者に魅力を伝えることができるさまざまなイベントを行った。

感染拡大が続くなか、異例づくめではあったが、多くの受験生が参加し、例年以上に受験生と保護者の受験に対する意識の高さを実感した夏のオープンキャンパスだった。

●個別相談コーナー（理学療法学科）

●学科体験（看護学科）

●学科体験（医療福祉・マネジメント学科）

●学科体験（視機能療法学科）

●学科体験（視機能療法学科）

Narita Campus

成田キャンパス

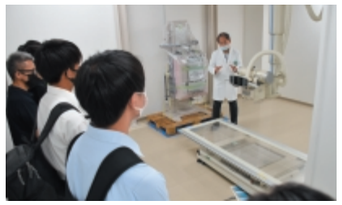
出口の見通せない新型コロナウイルス感染拡大で、例年春休みから始まるオープンキャンパスがいずれも中止に追い込まれるなか、成田キャンパスでは8月2日と22日、厳重なウイルス対策のもと、オープンキャンパスを実施した（医学部は22日のみ）。進路選択、志望校選択の情報を求めて、多くの受験生や保護者が来場した。

成田キャンパスでは、11月2日に学校推薦型選抜の出願受付が始まる。情報不足が心配される来年度の受験生に向けて、今後も細心の注意を払いながら情報発信に努めていきたい。

●学生による授業紹介（医学科）

●クラフト体験（作業療法学科）

●学生が遠隔システムで参加（看護学科）


●X線装置の見学（放射線・情報科学科）

Tokyo Akasaka Campus

東京赤坂キャンパス

東京赤坂キャンパスでは7月12日と8月23日に、今年2回目、3回目のオープンキャンパスを開催した。事前予約・定員制で来場者には手指消毒や検温を行い、ソーシャルディスタンスを確保するなどの対策を徹底した。

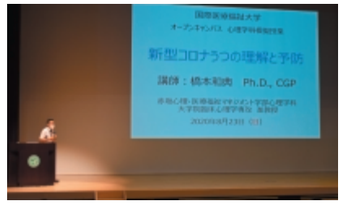
総合ガイダンスでは、心理学科と医療マネジメント学科の学修内容や卒業後の進路について教員が説明した。また、インタビュー形式の動画で在学生がキャンパスライフを紹介した。模擬授業では、各学科、生活に結び付けながら楽しめる講義を行った。

来場者からは「録画ではあったが学生さんの声が聞けて雰囲気がよくわかった」「ネットやパンフレットだけでは伝わらない内容を知れた」「模擬授業が興味深く、楽しく聞けた」などの感想が寄せられた。

●模擬授業（医療マネジメント学科）

●在学生へのインタビュー動画

●個別相談会



●模擬授業（心理学科）

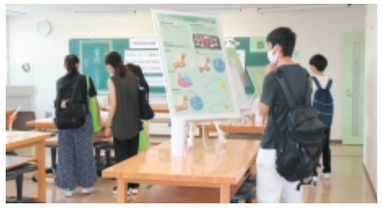
Odawara Campus

小田原キャンパス

小田原キャンパスでは8月16日、20日、23日の3回、オープンキャンパスを開催した。

今年度はコロナウイルス感染予防のため、参加人数を限定し、事前予約で行った。午前、午後の部ともに参加者は真剣なまなざしでガイダンスを聴講し、学科体験ブースでは在学生と積極的に交流をしている様子が伺われた。

開催時間は半日で短かったが、対面式での開催に参加者は満足している様子だった。


●作業療法学科体験

●総合ガイダンス

●看護学科体験

●理学療法学科体験

Okawa Campus

大川キャンパス

大川キャンパスでは6月21日、7月19日、8月1日、23日にオープンキャンパスを実施した。人数を制限した対面形式で、午前・午後の2部に分け、それぞれ同一内容・入替制で、学部・学科別プログラム、入試対策講座や徹底解説などを行った。

感染予防策に対する安心感もあり、回を追うごとに県外からの参加も増えた。各学科の教室で実施した「（感染予防のため自宅で待機している）在学生とのオンライン交流」も好評だった。このほか、「土曜日キャンパス見学会」を5回にわたり開催したほか、8月からは平日の「毎日キャンパス見学会」も実施している。

●特別講演会も実施

●総合ガイダンス

●個別相談会

●在学生とのオンライン交流

●学科別プログラム（医学検査学科）

Graduate school

大学院

今年度1回目の大学院オープンキャンパスを8月23日、東京赤坂をキーステーションに、大田原、成田、小田原、福岡の各キャンパスで開催した。

オリエンテーションでは、三浦総一郎大学院長の挨拶、大学院の特長と学生生活、入試の説明を行った。その後、分野・専攻ごとの進学相談会では、実際に指導に当たっている教員が、それぞれの特長やカリキュラムなどについて説明した。一部の分野では、Zoomを取り入れ、会場に来ることができなかった受験希望者との相談も行った。

また、昨年に引き続き開催した特別講演「研究計画書作成のポイント」にも多くの参加があり、出願を控えた参加者には有意義な時間になったようだ。

●個別相談の様子

●三浦大学院長による挨拶

●Zoomを使用した相談会

国際医療福祉大学病院

市民公開講座「新型コロナウイルスから身を守ろう！」

地域の皆様に新型コロナウイルス感染症と当院の対策や取り組みについて理解を深め、安心して受診していただくことを目的に7月18日、『新型コロナウイルスから身を守ろう！』と題し、市民公開講座を開催した。講座は約4カ月ぶりとなった。

感染症対策として、予約数を従来の6割に限定し、受講者には計3会場に分散してもらって座席間隔を確保。主会場の様子は副会場にライブ配信した。また、全員のマスク着用、手指消毒、十分な換気など、万全の対策の中での実施となった。

講演では、大竹孝明副院長が主に「今までの当院の取組実績」を、また、高橋和郎感染症室長は新型コロナウイルス感染症に関する基礎知識に加え、第2波に備え「これからどうすべきか」をわかりやすく解説した。

受講者からは「少し気が楽になった」「タイムリーな講演会でよかった」などの声が寄せられている。

栃木県北にも陽性患者が発生するなど、ますます予断を許さない状態だが、ライブ配信やビデオ・オン・デマンド（VOD）など、今までとは異なる形も選択肢に入れ、市民公開講座による情報発信を続けていきたい。

（総務課　平野幸宏）

●市民公開講座に参加した受講者

国際医療福祉大学成田病院

「地域医療連携懇談会（精神科）」を開催

8月8日、当院で初となる地域医療連携懇談会を感染拡大の防止に十分配慮しながら精神科で開催した。宮崎勝病院長の挨拶のあと、事務局から当院の紹介と地域医療連携室についての報告があり、精神科の中里道子部長（国際医療福祉大学医学部精神医学主任教授）が精神科の取り組みを紹介した。

終了後、病院の内覧を兼ね9月から本学附属病院で初めて開床する精神科病棟を案内し、出席者からは当院の規模や精神科独自仕様の外来・病棟に対し高い評価をいただいた。4月に予定していた開院記念式典や内覧会が中止になったため、今回は、地域の先生方に当院を見ていただく有意義な機会となった。今後も各診療科別の地域医療連携懇談会を予定している。

また、同日は一般の方向けに「第1回糖尿病教室」も開催した。こちらも感染リスクを減らすため、外部参加者と入院患者様で会場を分けた。糖尿病・代謝・内分泌内科の竹本稔部長（国際医療福祉大学医学部糖尿病・代謝・内分泌内科学主任教授）や看護師、栄養士らが講演した後、簡単な運動指導を行った。今後も地域の方々や医療関係者に向けた行事などを開催し、地域医療に貢献できるよう職員一丸となって尽力していきたい。

（広報室　篠原美咲）

●精神科病棟をご案内

国際医療福祉大学塩谷病院

災害初動訓練を実施

本年度第1回目となる災害初動訓練を7月18日に行った。当院は、栃木県から地域災害拠点病院と災害派遣医療チーム（DMAT）指定病院に指定されている。今回は災害発生時の緊急・的確な医療行為を行うため、塩谷広域行政組合消防本部の協力で実施した。

新型コロナウイルス流行下での大規模地震発生を想定して行い、搬送される傷病者に検温、トリアージを行い適切な処置室に誘導するなど、職員同士連携し緊張感を持って訓練にあたった。この結果、災害時に備え、一人ひとりがどのように行動すべきかを再確認できた。

●災害初動訓練の様子

矢板市内全8小学校で「感染予防教室」

例年は冬季のインフルエンザ流行期に実施している手洗い教室を、今年は新型コロナウイルスの流行に伴い、6月からに前倒しし、矢板市内の全小学校8校を訪問し、『感染予防教室』として実施した。

看護師と事務職がチームを組んで、各学校で映像や実演も交えながら、ウイルスの特徴、マスクの付け方・外し方、手洗い方法などについて児童に話した。

実施後の養護教諭アンケートでは、「開催時期がよく、内容も今後の参考になった。マスクをする、手洗い、換気、休養といった感染症予防の基礎知識が備わり、保健教育や保健指導に活用できる」などの回答があった。今後も地域に貢献する病院としての活動を行っていきたい。

（総務・人事課　荒巻一恵）

●小学校での感染予防教室

国際医療福祉大学三田病院

臨床検査科にウイルス検査室が完成

当院ではこのたび、3階の外来スペースの一部を利用して、新型コロナウイルス対応の検査室が完成した。遺伝子検査に欠かせない安全キャビネットを設置。検体処理時は防護服を着用し、感染予防に細心の注意を払っている。

4月末にLAMP法用測定装置が導入されたが、直後に接触者の検査要請があり、検査要員を急遽出勤させ検査は夜間まで及んだ。6月には成田キャンパスよりPCR装置も移設。検査要員の確保と検査体制の確立には大変苦労した。

現在、検査要員5人で月～土曜日に遺伝子検査（LAMP法・RT-PCR法）を実施している。検査室拡大により、受託可能検査数は約100件にまで増えた。検査実施数も増加し、連日残業の日々が続くが、可能なかぎり緊急依頼にも対応している。

結果を待つ患者様のことを考え、今後も迅速かつ正確な検査結果をご報告できるように検査を行っていく。

（検査室　佐藤良平）

●防護服を着用した検体処理中の技師

●ウイルス対応検査室の様子

国際医療福祉大学熱海病院

「新型コロナウイルス感染症を真剣に考えるセミナー」を開催

「新型コロナウイルス感染症を真剣に考えるセミナー」を8月5日、当院地下1階大会議室で開催した。熱海市では静岡県内初となるクラスター発生の認定事案が起こるなど、新型コロナウイルス感染症への市民の関心が高まる中でのセミナー開催となった。池田佳史病院長から「安心して医療機関を受診するために」と題し、飛沫や空気中に漂う微細粒子「エアロゾル」を介した感染を避けるため、マスク着用徹底の必要性について説明した。熱海健康福祉センターの伊藤正仁所長からは、「県内の新型コロナウイルス感染症の状況について」と題して、流行当初から現在までのウイルス流行状況の推移について説明があった。

感染管理専従看護師である髙橋俊子看護師、青木紀美子看護師からは、日常生活にも生かせる感染対策として、マスクの正しい着用方法や手洗い方法の留意点について、詳しく説明をした。

今回は、参加者数を限定しての開催としたが、予約開始からわずか2日間で定員の50人に達し、当日は参加者から積極的な質問が数多く寄せられた。

セミナー終了後は、参加者から医療従事者に対して労をねぎらう言葉が聞かれるなど、地域の中核医療機関としての当院への期待の高さを実感するセミナーとなった。

（総務課　村山京二）

●セミナーで参加者に話をする池田病院長

国際医療福祉大学市川病院

新病院長が就任し、2センター開設

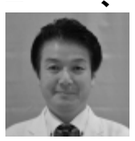
当院では7月、角田亘医学部主任教授が新病院長に就任したのを機に、リハビリテーション医療を含めた回復期・慢性医療に力を入れていく方針を打ち出した。具体的な施策として、神経難病センターと糖尿病・内分泌代謝センターを新たに開設し、診療科と連動して、高いレベルの医療を提供できるような体制を整備した。

神経難病センターは荻野美恵子医師（医学部・大学院教授）をセンター長に、併設の脳神経内科と協力し、パーキンソン病、筋委縮性側索硬化症、多系統萎縮症など、神経難病の診療やケアにあたる。近年、研究が進んで新たな治療が始まっている疾患もあり、患者様やご家族にわかりやすい医療を心がけていく。

一方、糖尿病はさまざまな合併症が懸念される。野見山崇医師（医学部教授・糖尿病・代謝・内分泌内科部長）がセンター長を務める糖尿病・内分泌代謝センターでは、病気を早期に発見し、個々の病態を把握し、個人のライフスタイルにあった治療法を選択して、長期にわたる治療を行う。平日働いている方にあわせて、週末短期や1週間の教育入院も実施している。

こうした取り組みを通じて、地域の皆様に職員一同で貢献していく。

（総務課・地域医療連携推進室　細田幸生）



●角田亘病院長

●荻野美恵子医師（神経難病センター長）

●野見山崇医師（糖尿病・内分泌代謝センター長）

山王病院

「さんのう健康講座」を再開

新型コロナウイルス感染症の影響で、3月から開催を見合わせていた一般の方向けの「さんのう健康講座」を7月30日から再開した。

これまでは山王ホールで毎月、50～70人程度の来場者を迎えて実施していたが、今回からは①当日会場参加30人（完全予約制）②後日ウェブで映像を配信―の2つの参加方法で申し込みを受け付けた。

30日は泌尿器科部長の小津兆一郎医師（臨床医学研究センター教授）による「前立腺がん・ロボット手術でできること～ミリ以下の膜を区別する～」と題して講演。8月13日には、4月に着任した、糖尿病内分泌代謝内科部長、小田原雅人医師（臨床医学研究センター教授）による「糖尿病のお話～新型コロナの話題も含め～」を実施した。

会場が密になることを懸念していたが、予想以上にウェブ配信での申し込みが多く、来場者同士の間隔を保つことができた。糖尿病の講座では、新型コロナの話題に興味を持って申し込まれた方もあり、このような中でも健康講座を実施する意義を感じられた。

今後も当院の医師や治療に興味を持っていただけるようなテーマを企画し、ウェブ配信の利便性を生かした、より充実した健康講座にしていきたい。

（総務課　山本悦子）

●小田原雅人医師による講演

よさこいチーム（大田原キャンパス）

人生のなかで最もキラキラ輝くはずの大学時代。しかし、保健医療学部看護学科の学生が組織する応援団「よさこいチーム」メンバーのあり余る活気や情熱は、新型コロナウイルス感染拡大を阻止するための「活動自粛」や「ステイ・ホーム」という対策の前に行き場を失っていた。緊急事態宣言が解除されても、彼らはしばらくの間オンライン授業を受けるだけの日々が続いていた。

毎年５月中旬に開催される運動会が今年は中止となった。看護学科では、例年この運動会を機に「よさこいチーム」が結成され、応援合戦では他学科の追随を許さず、優勝を勝ち取ってきた。チームの活動は運動会の応援合戦に留まらず、全国の各種イベントへの参加、また施設のボランティアなど多岐にわたっていた。４月、新入生は看護学科伝統の「よさこいチーム」への参加で、看護学科の一員になると言っても過言ではない。そして、運動会が２年生の「よさこいチーム」新団長のお披露目、また３年生の団長・団員の解散といったセレモニーの場にもなっていたが、今年はその機会を失った。それは看護学科「よさこいチーム」の存続の危機を意味していた。

看護学科は、約20年前から運動会の応援合戦で『よさこいソーラン』を演舞してきた。広いグラウンドいっぱいに、手縫いの法被をまとい、150人が一糸乱れず踊る姿はまさに圧巻であり、教員として看護学科の学生を誇りに思う時間でもあった。

「自分たちにできることは、家にいること」。医療を志し学んでいる彼らにとって、この春からこの言葉は、歯がゆいばかりだったことだろう。しかしその思いの中から、彼らは「家にいてもできること」に挑むことになった。

４年生の前団長、駒場幹幾さんの呼びかけに、３年生の団長の北澤陸人さん、２年生の新団長の青柳伸之介さんが応え、それぞれ団員に声をかけ、それぞれが「自宅リビング」「家の倉庫」「自宅前の広場」等でよさこいソーランを舞い、リモートで応援団のたすきをつないだ。引退後の４年生も有志が参加した。

卒業生で在学時応援団長だった佐藤純也助手が編集を手伝い、５月には医療従事者の皆さんにエールを送る動画が完成した。同時に、心細い思いをしている新入生に向けてのメッセージ動画も撮った。

大学生にとってかけがえのない夏も、今年は「よさこいチーム」が集まっての活動自粛は続いた。彼らの熱いエネルギーが解き放たれる日が楽しみである。

（看護学科講師　森川奈緒美）

広報誌 IUHW 122号　発行：学校法人 国際医療福祉大学

〔大田原キャンパス〕
栃木県大田原市北金丸2600-1 ☎0287-24-3000
〔成田キャンパス〕
千葉県成田市公津の杜4-3 ☎0476-20-7701
〔東京赤坂キャンパス〕
東京都港区赤坂4-1-26 ☎03-5574-3900
〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山1-2-25（本校舎）☎0465-21-6500
〔福岡キャンパス〕
福岡県福岡市早良区百道浜1-7-4（1号館）☎092-407-0805
〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津137-1 ☎0944-89-2000
編集：広報部 ☎03-5574-3828
デザイン：野佐デザイン

医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。
国際医療福祉大学
ホームページでもご覧いただけます。
https://www.iuhw.ac.jp/
©国際医療福祉大学20200　Printed in Japan　禁無断転載・複写